

## 故ニック・ユソフ君の墓前供養

——「原爆死没者追悼式」に参りし「ユソフ君」の墓前供養 歯学部 菅野義一信



鉢のゼラニウムが何本か枯れた特別の暑さ、そして枕崎台風の再来と、天は45年前を忘れるなど言っているような今年の夏であった。

故ニック・ユソフ君の供養は8月6日広島大学原爆死没者追悼式のあと、午後2時から五日市の光禅寺の墓前でとり行われた。

星月住職様の読経中、参加者が次々と焼香した。仏式供養のあと、学生部長の肝入りで参加してくれたマレーシアからの留学生はイスラム教にのっとったお詣りを行った。

供養に参加して下さった市民の方々は池内智恵子、中村千重子、吉川英子、増村昭子の皆さん方、そして留学生は経済学部のチャン・カンニー、工学部のモハマド・ノーヒシャム・イリアス、医学研究科のアムラン・ビン・アームドの3名であった。広島大学からは田中隆莊学長、横山英名誉教授、川上英之広報委員会委員長、水谷久人庶務部庶務課課長補佐、橋本文書係長、秋山吉功秘書係長、山口博国際主幹、與那原進留学生主幹に小生が加わった。広報委員長に大きな関心を持っていただいたのは幸いで、前号22期4号(No.283)に学内通信14期8号(1983)の江

上芳郎氏の「南方特別留学生と原子爆弾被爆」が再び載録された。この中には、今年も供養に参加され、南方特別留学生とともに生きるために苦闘された市民の方々の被爆直後の日々の様子が、当時の姓名で臨場感をもって綴られている。



墓前の供養後は、広い本堂の一角に、光禅寺の御好意で用意された席で、この1年間の無事を互に喜び合い、当時の想い出話等を静かに語り合った。私は昨年「21世紀のための友情計画」で日本政府により、ほぼ2週間日本に招へいされたマレーシア青年男女が墓前に立寄ってくれた時、故ユソフ君の家族はここへ来ましたかと質問されたことを披露した。墓の出来たことをお知らせはしたが、来日には消極的であったようだと言ったが、戦時中に言わば強制連行されて被爆死しては、供養のため等に、日本にくる気になれないのも判るように思う。

これに対し市民のお一人は南方特別留学生たちは長旅の船中で、互いに日本軍の所業については口をつぐもうと話し合ってきたと漏らされた。まだまだ語られない、戦時中の外

国への傷は少なくないと思われる。銘記しておくべきことであろう。

被爆からあと5年で50年になる。30年の時に、正確には昭和49年8月6日に広島大学の

追悼碑が除幕され、昭和50年に「生死の火」が刊行された。この供養も50年忌まで続けられるであろうか。

文責と世話人：歯学部 菅野義信

# 第 29 回 オ マ ー ル 氏 法 要

原爆放射能医学研究所 宇 吹 暁



9月2日11時、京都市一乗寺の円光寺で、サイド・オマール氏（マレーシア出身の南方特別留学生、広島文理科大学在学中被爆、昭和20年9月3日京都で死亡）の45周年目の供養が営まれました。また、墓前での法要終了後、修学院の平八茶屋本店で懇親会が持たれました。



参列者は17名、広島からは、故人と生前親交のあった菅野義信（本学歯学部教授）・吉川英子・中村千重子の御三方と小笠邦久御夫妻、中野伍法・経済学部事務長補佐、それに私の7名が参列しました。

私は、広島大学原爆死没者慰霊行事委員会から派遣されての初参加でしたが、法要に、先だつ30分ほどの間と懇親会の席で、世話人である園部宏子様より、参列者の皆様の故人との関係を丁寧に説明していただきました。はるばる東京から参加された上遠野寛子様は、故人の来日当初に日本語教育などのお世話をされた方とのことでした。今年8月3日のジャパンタイムズは、「マレーシアの原爆被爆生存者、日本との深い関係を発展させる」などの見出しで、南方特別留学生についての特集を掲載していましたが、上遠野様が持参されたこの記事のコピーを囲んで、参列者は改めて往時を偲びました。また、数年前より京都大学工学部がマラヤ大学と学術交流を行っていますが、その関係から得丸英勝同学部長が参列されていました。私は、あらかじめ「天の羊—被爆死した南方特別留学生」（中山士朗著、三交社刊）を読んでいました。しかし、この一日の体験は、書物からの知識では得られない貴重なものでした。